

# Platform

レトロスペース  
ペクティブ

昭和

station

知らないのに、  
あの時代の匂いがする。

- VRChat : 哲学カフェ 芳紅堂
- cluster : さよならの向こう側
- Resonite : Lost in Japanese summer
- Real.W : オートレストラン

# Platform

Vol.11 contents

Gravure: Japan After School	.....	4
哲学カフェ 芳紅堂 Japan After School billis kitchen 1950s VRChat	.....	12
さよならの向こう側 cluster	.....	18
Lost in Japanese summer Resonite	.....	24
オートパーラー上尾 後藤商店 自販機オーナーオアシス Real.W	.....	30
あとがき	.....	36

第11号のテーマは「60's~70'sレトロ」。

今や「平成レトロ」なんて言葉もあるそうですが、レトロの本場はやはり昭和。今号ではいろいろな「レトロ」の形を切り取りました。二度と戻れない故に美しく、二度と触れられないが故に輝きます。

VR世界は産まれてまだ若いですが、そこに再現された「疑似過去」は、あなたにどんな感情を呼び覚まさせるでしょうか？

編集長

◀ To the next PLATFORM.



世界には、色んな町がある。  
その町ひとつひとつに、駅がある。

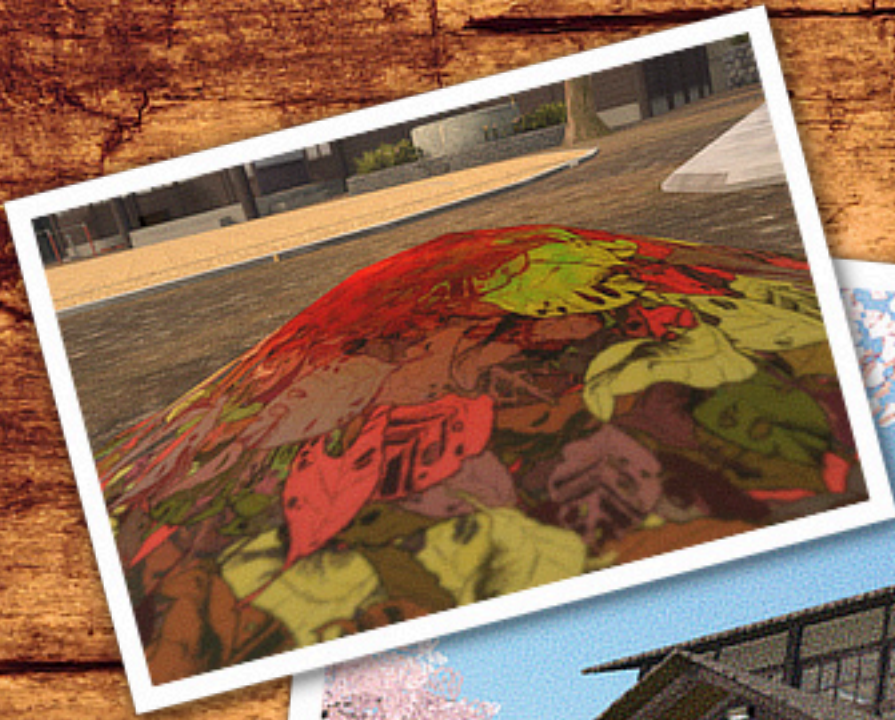
どの町も駅もそれぞれ違っていて、  
違った人たちがいて、  
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、  
きっと違うのだろう。  
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、  
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」

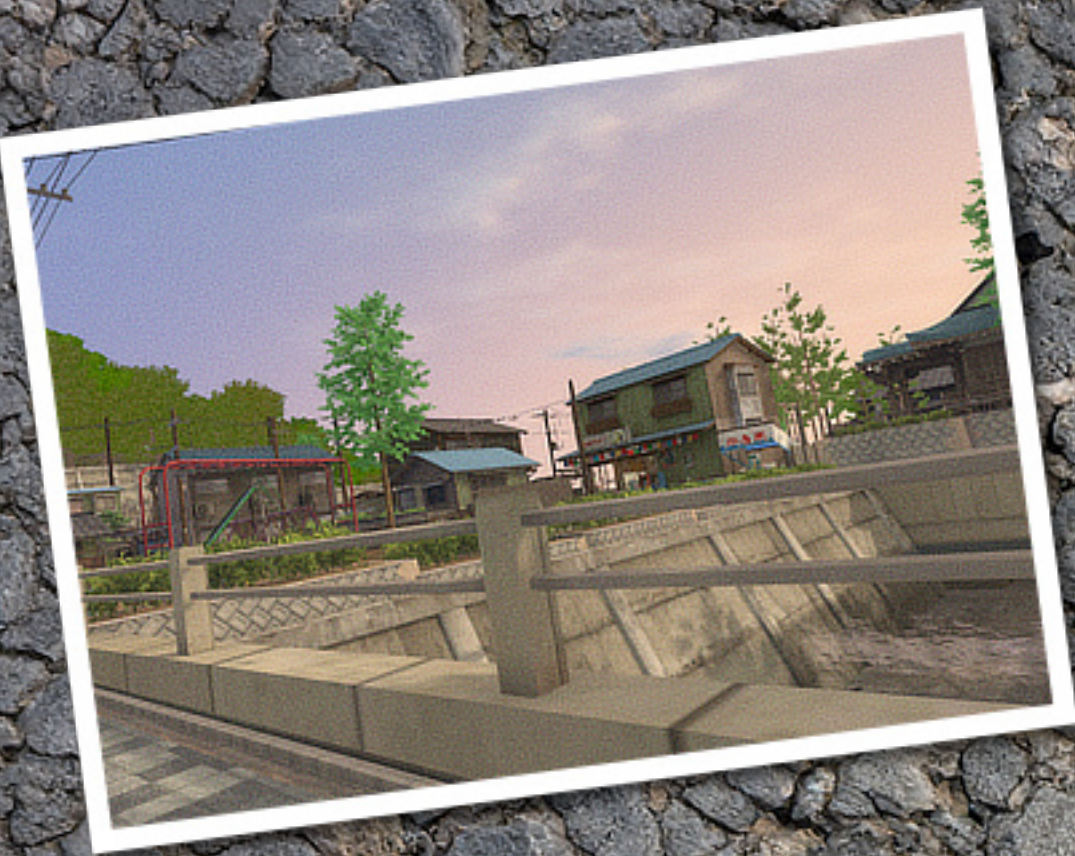


四季を彩る



昭和の校舎

いつも通った



かえりみち

どこかで感じる

懐かしい記憶



あの頃の夕日



World: JapanAfter School

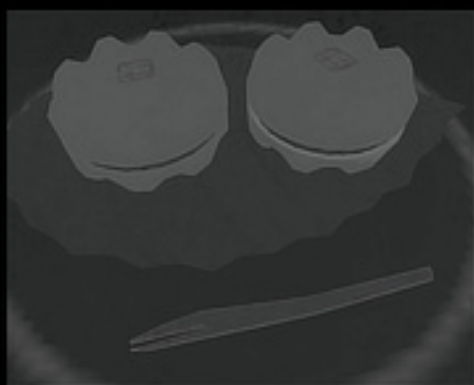
Created by WAPAN

哲学かふえ

# 芳紅堂

今、貴方が捲ったこのページは鮮烈な色彩を放っているだろうか。貴方がもしキラキラと光るそのクオリアに触れているのであれば、一秒でも長くその記憶を留めておいてくれないか。このページの写真も文章も私たちの前では既に冷や麦のように温度を失って変質してしまっている。私たちはもうあの頃と同じクオリアを感知できないんだ。

——「現代」の私より



## 昭和レトロ 哲学紀行

「昭和」とは何か？  
関連するワールドを巡り、  
その謎を紐解いてみよう。



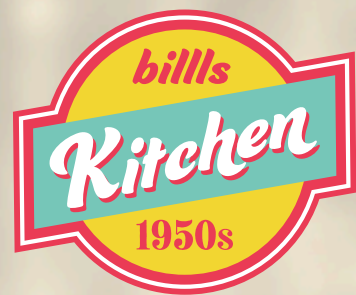
### 遠

くに潮騒の音が聴こえる。ゼンマイ式の振り子時計がメトロノームのようにコチコチと音を立てて、蓄音機から流れる籠った音質の歌謡曲の音頭をとっている。ここは「哲学カフェ 芳紅堂」。訪れた人たちと哲学対話を楽しむことができる特異なカフェだ。ついさっきまで私は一人木製の椅子に腰掛け、電球に照らされた入口の立て看板をぼんやり眺めていた。このページを捲った貴方と哲学対話をしたくて待っていたんだ。テーマは今号を冠する「昭和レトロ」、これは一体何なのか？なんてどうだろう。ああ、でもその前に、そうだね、このワールドはどちらかというと「大正ロマン」かもしれない。だけどここに

子はきつと昭和の時代にも普通に使われていたと思うけど、どうだろう。いや、わかるよ、そうは言っても「大正ロマン」と「昭和レトロ」は何かが違う。じゃあ例えば、このワールドはどうだろう、今ポータルを開くね。

ここは「Japan After School」、放課後の帰り道を模したワールドだ。木造の校舎やトタンを貼った家々、寂れた駄菓子屋、野暮ったい定食屋。これは何となく「昭和レトロ」を感じないかい。三輪スクーターなんかも、ああ、昭和だなんて私は感じる。……なんだか『人間失格』の悲劇・喜劇名詞みたいになってきたね。寂れた駄菓子屋や三輪スクーターは昭和名詞、大衆食堂は……うーん一応昭和名

詞かな。じゃあ、あそこの公民館の縁側で音を立てている扇風機はどうだろう。扇風機自体は大正時代に大量生産されて以降、昭和・平成・そして令和と時代を渡って来た。これは何名詞なんだろう。ああ、でもガードの真ん中にぼっかり空いている穴は何となく昭和名詞な気がする。昭和レトロはモノや形状に宿るのかな。いや、少し違うか。「昭和」という歴史の一時代に息づいた存在に対して私たちは「昭和レトロ」を感じるのかもしれない。じゃあここでもう一つ、行っておきたいワールドがあるんだ。ポータルを開くね。



## レトロアメリカン キッチン

1950年代のアメリカの  
彩りのあるキッチン。  
レトロな家電や家具が並ぶ。

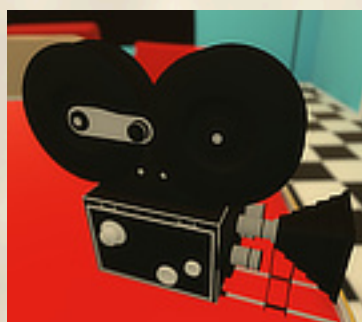
Bills Kitchen 1950s

By billy

 ACCESS



ブラウン管のテレビ



フィルムのカメラ

して感じる差異、そしてそれは型が古い  
だとかチープだとかそんな機能的な差異  
ではなく、「昭和」と「現代」の時間的  
な距離によって生じる、あるモノについ  
て「まだ息づいている」と感じたり「も  
う息づいていない」と感じたりする印象  
の差異のことなんだ。私たちは今を生き  
ているから過去には戻れない。その絶対  
的な時間の不可逆性を前に浮かべる諦念  
や後悔や憧憬によって「昭和」のクオリ  
ティは一層浮き彫りになるんじゃないかな。  
二つ目は「経験の蓄積」。私たちは日  
々「現代」を経験しているけれど、通常  
は、ある時代に息づいたものからは順次  
卒業していくよね。携帯型音楽プレーヤ  
ーだって、カセットテープからCDへ、  
CDからMDへ、MDからハードディス  
クへ。でも逆に、例えばスマートフォン  
やパソコンも使わずにずっと「昭和」の  
生活を続けている人は「昭和レトロ」を  
明確に感知するだろうか。多分できない  
だろう。ということとは、「現代」にどっ  
ぷり浸かっているからこそ、逆から見え  
る「昭和」を捨ててきた、あるいは捨て  
る「昭和」さえ未経験だったからこそ、  
「昭和」のモノたちに共通するクオリティ  
は総体として形作られ、鮮明になってい



子どもたちの  
ほうかご Japan  
AfterSchool

## 昔の子どもたちの かえりみち

昭和の風景を感じさせる街。  
大衆食堂や駄菓子屋など、  
懐かしい風景を思い起こす。

Japan AfterSchool

By WAPAN

 ACCESS



寂れた駄菓子屋さん



昭和な大衆食堂

ビビッドな色が飛び込んでくる。ここ  
は「bills kitchen 1950s」。1950年  
代のアメリカ風のキッチンを模したワー  
ルドだ。これも一つの「昭和レトロ」と  
してカウントできそうだと思うかい、  
どうだろう。因みに私は……うん、あ  
まりそう思わない。でもそれは国が違う  
からだとか馴染みがないからだとかそう  
いうことじゃないんだ。  
ちよっとテーブルの上のフィルムカメ  
ラを動かしてみたい。カメラを向け  
た場所がそのブラウン管テレビにモノ  
クロの映像として映し出されるんだ。私  
はこのブラウン管越しにこのワールド見  
ることで漸く「昭和レトロ」を感じるみ  
たいだ、不思議なこと。一度、カフェ  
に戻ろうか。  
ワールドを巡って気付いたのだけれど  
も「昭和レトロ」とは「昭和」という時  
代に息づいた存在やモノたちについての  
印象や質感、それらに共通したクオリティ  
とでも呼ぶべきもので、それは二つの触  
媒によってもたらされるものなんじゃな  
いかなって、私は思うんだ。  
一つは「現代との差異」。「昭和」と  
いう歴史の一時代に息づいた存在を前に



芳紅堂は定期イベント  
はなく、パブリックで  
開放されています。



## パブリックで開放 知の語り場

芳紅（ぽこ）堂はパブリック  
インスタンスで開放されてお  
り、訪れた人たちと知的刺激  
のある哲学の話題で語り合え  
る場を提供している。



お話しできるスペースがあり、テーブル  
を囲んで会話を盛り上げることも。

### 哲学カフェ 芳紅堂 By ぽこ（芳紅）

昔の学生が入り浸ったレトロな喫茶店  
をイメージ。知的刺激のある話題  
を語り合う場となっています。

 **ACCESS**



## 昔の学生が入り浸った レトロな喫茶店

昔の学生が集まったレトロな喫茶店を  
イメージしたワールド。  
重厚で落ち着いた雰囲気が感じられる。



アンティーク調のある、落ち着いた喫茶店。

くんじやないかな。ああ、えっと、つま  
り、ある時代に息づいたモノたちとどう  
関わりを持ってきたのか、その関わりの  
厚みや継続性の度合い、あるいは欠如の  
度合いに依りて、そのモノたちが共通し  
て持つクオリアが与えられるんじゃない  
かな、って思うんだ。

そして……思い至って私が少し、怖い  
なと感じたのがこの二つの触媒の性質。  
もし私たちが過去に戻れたとして、「昭  
和」の世を過ごしてみれば「現代」を経  
験している私たちはきつとその暮らしの  
中で鮮明な「昭和」における様々なクオ  
リアを感じるのである、暫くは。そ  
う、時間的な「現代」も「現代+昭和の  
時間」として変遷してしまうし、その暮  
らしを続けていけば昭和の経験が個別の  
モノたちごとに少しずつ蓄積されていっ  
てしまう。そうすると徐々に「昭和」の  
総体的なクオリアは減退していかないだ  
ろうか。今と過去との隔たりを失うこと  
で全てが「現代」の経験の中に溶け込ん  
でしまふとともに、「昭和」のモノたち  
と関わりを持つことで、その総体的な印  
象・質感を語ることに難しくなっていく。  
私も知らず知らずのうちにブラウン管を  
通してしかあのキッチンの「昭和」を感

知できなくなりつつあることにさつき気  
が付いたんだ。「昭和レトロ」は変遷し  
ていく現代と、経験というバイアスの影  
響を受けて変質していき、最悪いつかは  
消えてしまうのかもしれない。今日見た  
風景は明日同じ風景として捉えることは  
できるのだろうか、なんて。

さて、今日はありがとう、楽しかった  
よ。それと……いや、やっぱりいや。  
またいつか、貴方がページを捲ったその  
時にでも。

(文・ヤマノケ)

今、海外を中心にシテイポップがリバイバルしているらしい。竹内まりやの『プラスチック・ラブ』が発掘されたこと、ヴェイパーウェブが流行していることなどから、Japanのanimeやmangaとは異なった「オリエンタル」な雰囲気を受けているようだ。まあ、このあたりの知識はうる覚えだし、正しかったとしても、シテイポップの解説本に書いてあったことの受け売りであるのだが。

1970年代から80年代というのは実に魅力的な時期だと思う。ちょうど昭和が終わりに近づき、オイルショックで景気が悪くなったとはいえ、日々新しいモノが発売され、日進月歩で性能が良くなっていく。うん、人類はこれからもガンガン成長していくんだ、とあのそびえたつ太陽の塔が語りかけてきていた。

「人類の進歩と調和」。1970年の大阪万博は確かに輝く未来を見ていた。

TOKYOでは政治の季節を通り過ぎた若者たちが消費社会の最先端を走ろうとし、80年代になるとそれが加速する。どうだい、西部百貨店にはデカデカと「不思議、大好き」「おいしい生活」な



嘘、である。

今や日本中がサイコーに盛り上がっててさ！次々に新しいものが出てきてさ！右肩上がりです！これから日本はまだまだよくなるはずなんだよ！日本全土が明るいんだよなあ！！

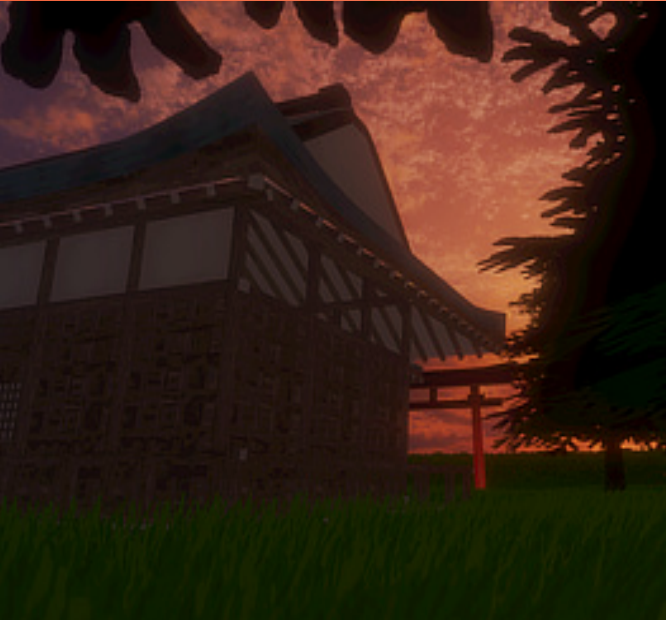
今や日本中がサイコーに盛り上がっててさ！次々に新しいものが出てきてさ！右肩上がりです！これから日本はまだまだよくなるはずなんだよ！日本全土が明るいんだよなあ！！

# とりののこされた場所で

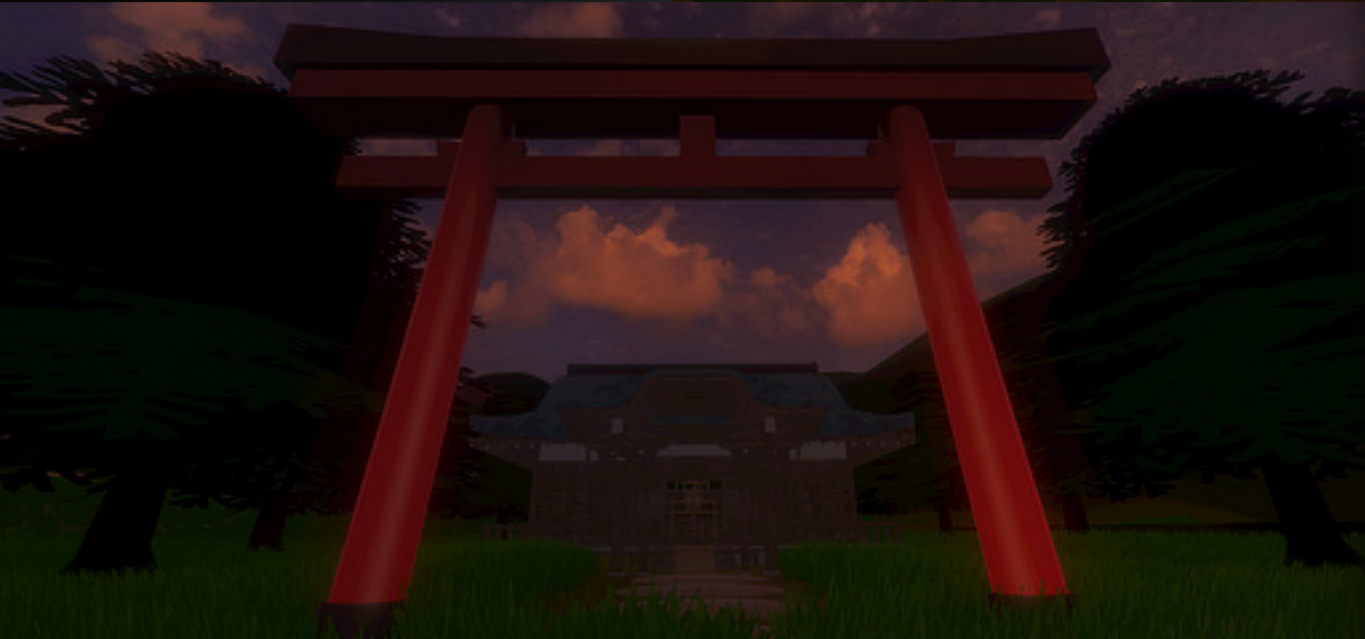
文・ニッソ編集長

80年代はともかく、70年代の日本は、まだまだ敗戦直後、いや、戦前から連綿と続く営みが日本中に残されていた時代でもあったのだ。多分、大部分の人が教科書で読んだことのある集団就職。田舎から東京に向かって中卒者が送られるアレだ。集団就職列車の最終便は、確か1973年だったはずだ。未来を見据えて屹立する太陽の塔の下に月の石がやってきた、そんな未来を感じさせた大阪万博の3年後まで、中卒者が労働力として地方から都会へ送り出されていたのだ。まだまだ田舎は田舎のままで、そこには「日本の原風景」だの「エモい」だのという安易な感傷を拒絶するような、絶望的な「田舎」が存在していたのだ。例えば、VR上に再現されている、この棚田のワールドのように。

個人的な所感であり、学術的な理解と



生きていくしかない  
合理化の果ての  
柵田  
集団就職  
絶望的な  
田舎  
列車  
帰らぬ  
行くも  
なんとかしてここで  
生きていくしかない  
柵田  
集団就職  
絶望的な  
田舎  
列車  
帰らぬ  
行くも  
なんとかしてここで



は異なるかもしれないが、「柵田」というのは美しいと同時に非常に貧しい土地であることを強調しているように思える。急傾斜の斜面に作られたものが典型的だが、本来であれば水田耕作に向かない土地に、なんとかかへばりついて米を作っているように私には見える。「なんとかしてここで生きていこう」、いや、「なんとかしてここで生きていくしかない」という覚悟と悲壮感から作られた柵田は、生き残り、整備されている時だけは美しく見える。合理化の果てに形成された美しさともいえるべきか。

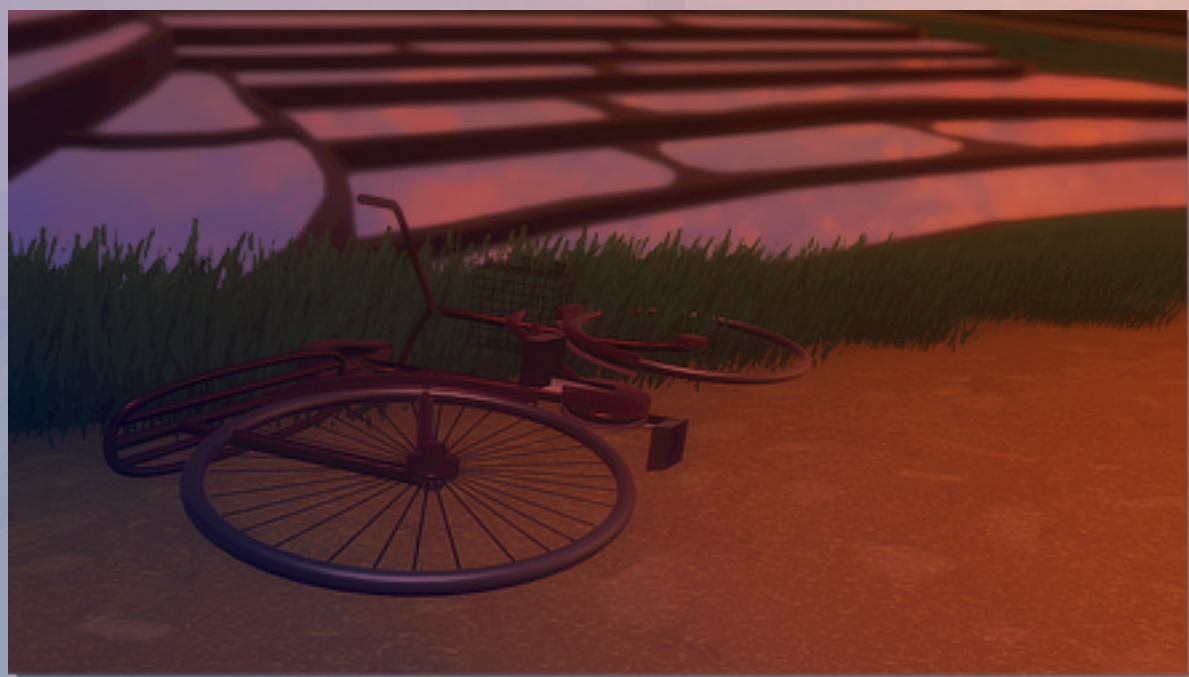
そんな悲壮感を勝手に覚えてしまうこのワールドを歩いていると、小さな神社が見えてくる。これだけ小さな神社ならば、多分村の中でずっと信仰されてきた神様が祀られているのだろう。明治末期から大正初期の神社整理事業を生き残り、自然災害を乗り越え、この柵田からも米がとれず、大根をかじりながら餓死していった子どもを見つめ、光る敵機が落とす爆弾の炎から目をそらし、漸くやってきた平和の中で、中学を卒業した若者が都会へ行く、その背中を押してやった。そんな小さな神様が。



# さよならの 向こう側

Created by うさだぬ

 ACCESS in cluster



どうかこのまま、せめてVRの中では、ここの全てが取り残されませんように。神社の小さな神様に祈った。

(文…ニッソ編集長)



神社から線路が見える。この線路をつたって、若者たちが都会へでていく。彼らはきらびやかな都会に根を下ろすだろう。帰って来るのも盆と正月だけで、いや、70年代から80年代は24時間戦えますかの時代だ。自宅にすら帰れない彼らが親元に帰ってくることはもうないだろう。

このワールドの空はオレンジ色だ。多分夕焼けだろう。若者がTOKYOに向かい、取り残された父母たちが老いていき、あの神社に訪れる人もいなくなる。あの土地にへばりついていた生の営みが夜の闇に消えてゆく。その最後の一瞬を切り取ったワールドがここなのだ、制作者の気持ちも知らず考えている。

今リバイバルしている、シティポップをはじめとした70's—80'sブームは、都会のムーブメントを切り取ったものだ。別にそれはそれでかまわない。私だってそういうのは大好きだ。

だが、ブームというのはその中でもブームから取り残されたものたちを

生み、そしていつか終わりを迎える。思い返せば、昭和期において棚田は奇しくも70年に始まる減反政策のありを受けてほとんどが崩壊していき、逆にいま「棚田遺産」などと持ち上げられる始末だが、こんな一過性のブームや翻弄とは別に、各々の場所には、棚田とともに生きた、そして葛藤と泥に塗れた人々の生活が確かにあったはずなのだ。

だからこそ、70's—80'sブームと同じくらい、棚田が眼前に広がる場所にも思いを馳せたい。とりわけ、ブームから取り残され、夜の闇に沈み、最期の輝きすら終わってしまった、もう雑草だらけになった棚田がある田舎のような、取り残されてしまった場所があることに。そして、いつか我々が住む都会が、あるいはVR内の人気ワールドが、そうやって終わりを迎えてしまうかもしれないことを考えたい。

最後にもう一度だけ一番高いところにおいて、このワールドの全貌をみる。棚田に赤い空の色が反射する。電車が遠くを走る。





**私**は平成生まれだが、昭和時代の写  
真などを眺めると、何故か懐かし  
い気持ちになる。きっと、幼少の時分に

親しんだ『ドラえもん』の漫画（1969年連載開始）や、『はじめてのおつかい』（1977年発刊）という絵本で見た情景が、そのまま子供時代の記憶として結びついているのかもしれない。

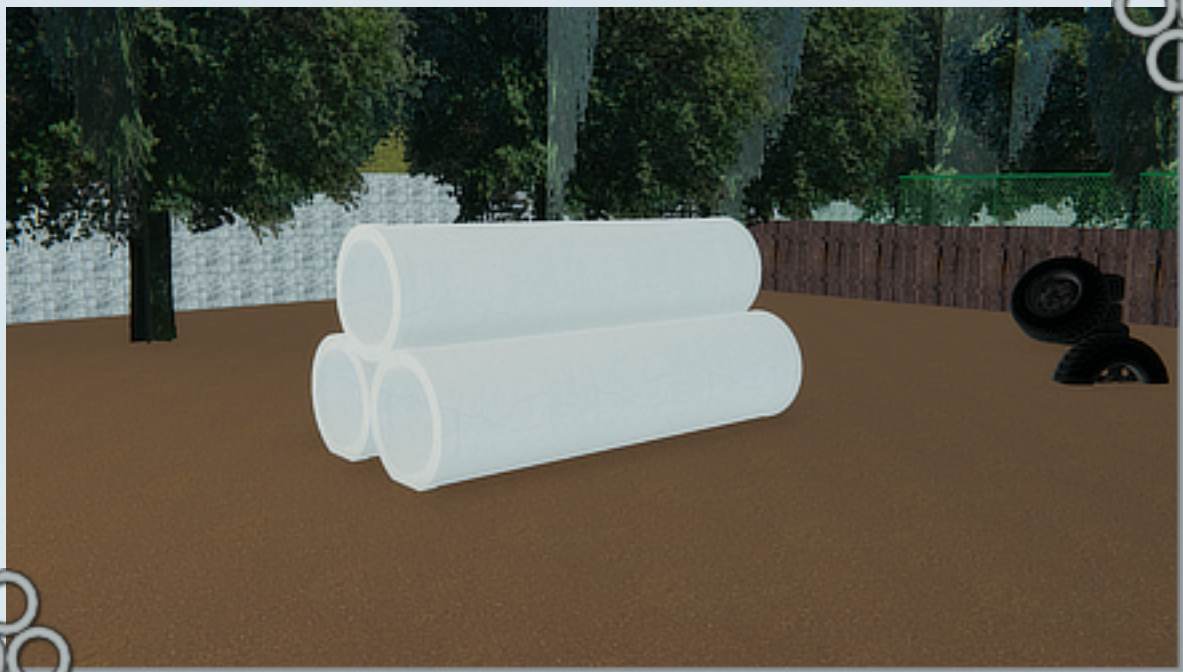
それこそ『ドラえもん』における「空地の土管に座って遊ぶ」というシチュエーションに憧れたこともある。都市開発が行き届いた平成時代を振り返れば、大人の目を窮屈に感じた生意気な少年だった私は、子供たちだけの空間を求めていたのかも知れない。

実際、小学校近くの空地に置かれた建築資材に座って、友だちとお喋りしたこともあったが……その空地の「地主」に叱り飛ばされ、追い出されたことがある。今にして思えば、勝手に入られた挙句に資材を壊されたり、逆に怪我でもされたり賠償ものである以上、悪いのは明らかに侵入した私の方だったわけだが、当時は「空地に置いているなら、勝手に使われても文句ないだろ」と不平を言ったものだ。同時に、『ドラえもん』のような空地は、そして子供の居場所は現代にはないと悟り、「大人の身勝手さ」への反感が強くなった。

## 空き地に見出した羨望

Lost  
Japanese  
summer

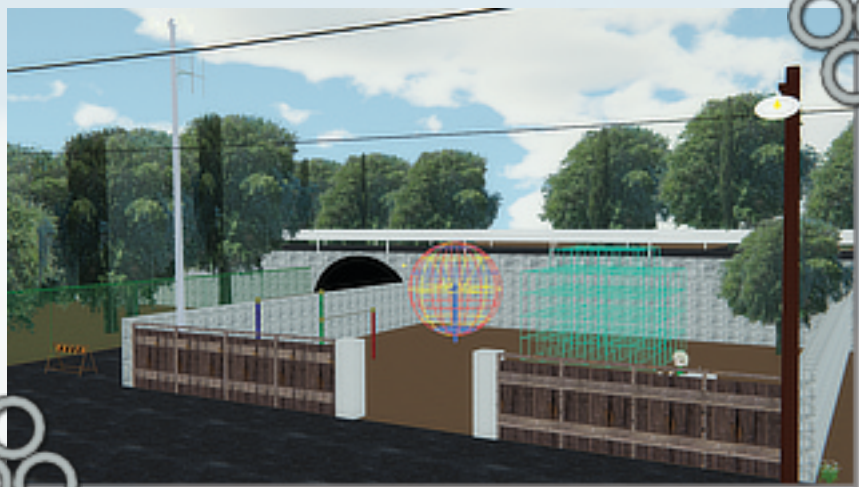




そのような経験もあってか、昭和中期〜後期特有の風景を見ると、どこことなく懐かしさや哀愁、そしてある種の羨望を覚える。今回紹介する Resonite のワールド『Lost in Japanese Summer』にも、そのような羨望を見出せるだろう。余談だが、ワールドは2022年の2月頃に開催された、Metaverse Maker Competition 22と呼ばれるワールド作成コンテストに応募されたものである。

そこは河川敷のすぐ傍にある一画。スポーン地点である車道の中央で佇むならば、感傷を呼び起こすような蝉の声に酩酊しそうになる。それは、コンクリートのビル群特有の蝕むような蒸し暑さというよりは、草葉に滴る雫のように清涼で、柔らかな空気を連想させるだろう。

自動車が一切通らない——つまり車道の真ん中で大の字になっても許されるこの場所を、自由気ままに散策してみた。すると——あった、



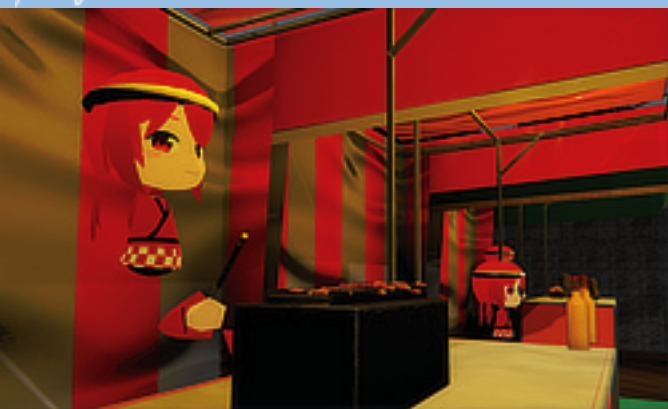
あの空地が。ドラム缶、タイヤ、三角コーン、それから土管。子供の頃には実現できなかった小さな夢を、何にも囚われないメタバース空間で、ついに叶えることができる。土管に座り、友人と語らう夢を。

他には、ジャングルジムや鉄棒がある公園も出てくる。素朴な襖や畳がある、何の変哲もない平屋からは、なぜだか実家の匂いが香ってきそう。土手道や橋を歩めば、涼しい風が膝裏や脇下をくすぐるかのような心地になる。

殊更に「昭和レトロ」を感じさせるのは、菓子・玩具が売られている店舗だ。壁に張られたポスターや、牛乳瓶が収められたガラスショーケース型の冷蔵庫などは、現代でも老舗旅館や年季の入った銭湯などに行けばたまに目にする。私が現実世界で見えてきたものと違うのは、ポスターが色褪せていないこと、冷蔵庫が錆び付いていないこと。当時の新鮮な記憶を永久保存したこの世界に、私の両親を連れてくればどのような反応を見せるのだろうか？

飛行機の模型や紙風船、駄菓子もさることながら、おまけシールが封入されたチョコレートに目を惹かれる。現代でもこういった、おまけが本体と言われるお菓子は人気だが、脈々と受け継がれるこの伝統について語れば、当時の人たちとも親しくなれるのだろうか。





# Lost in Japanese Summer

Created by Tanossy

 ACCESS in Resonite

ってしまふのだろうか？  
 メタバースという空地には、日々新たなワールドが生まれていく。発展途上の世界だからこそ、自由に遊びまわったり、空想に夢中になれる一面もある。やがて、空地がなくなってしまうたら……？ 私  
 は神妙な面持ちで満月を見上げていた。

(文：sun)

ところで、自治会案内板にあるボタンを押すことで、このワールドは昼から夜に変貌する。蟬の鳴き声は、瞬く間に楽しい気な笛の音に変わり、案内板向かいの空地には屋台や櫓が現れる。  
 私は縁日のたこ焼きや焼きそばが大好きだ。家族や友人、恋人と共に食べ物を買って、人混みを掻き分けながら座る場所を探して——やっとの思いで腰を下ろした場所が、賑やかな場所から離れた落ち着く場所だった。そんな過程が好きなのだ。仮にこのワールドで、親しい人間と隣り合って腰を下ろすとなれば、土手にある階段が個人的には第一候補である。打って変わって夜の時間だけ、幾千ものホタルの光が立ち昇る、幻想的な川沿いを眺められるスポットに早変わりするためだ。

土手階段に腰掛け、辺りを見回してふと思う。土手道の先や川の対岸には、まだ未開発の「空地」がどこまでも続いている。もしもこのワールドが、ビルで埋め尽くされ、自動車が行き交うようになって、周囲の目を気にするようになってしまったら、「昔は良かった」と私も言





Real World



# オートレストラン ノスタルジー

オートパーラー上尾

自販機コーナーオアシス

後藤商店

写真／わく

レトロな自販機がいっぱい！

## オート

## レストランを

## 知ってるか？

昭和レトロという（いかにも私向きの）

テーマをいただいたものの、このテーマに沿う場所を現実世界で探そうとすると少々困ったことが起こる。通常、昭和レトロな場所といえば、昭和三十年代の高度経済成長期がメインだろう。私が行ったことのある場所だけでも、青梅の昭和レトロ商品博物館、湯布院の昭和館、久慈の昭和の想い出博物館などがある。これらの場所では、昭和三十年代の瑠璃看板や三種の神器の古い家電、ブリキのおもちゃなど、当時の生活用品が飾られている。時を遡って昭和二十年以前のレトロな物品は、各地の公営の郷土資料館

に民具などが保管されている。

ところが高度経済成長期が終了した後の時代では、「昭和」という名前／イメージとともに懐古される「手に取れ、触れられるもの」があまり思い浮かばないことに気づくだろう。実際、1970年代から1980年代にかけての生活用品を保存した資料館は、あまりない。特に1980年代以降は、物理的な生活用品ではなく当時のテレビCMやアニメなど、むしろメディアコンテンツの質感に対するものへとノスタルジーの対象が変化している。2010年代以降、ヴェイパーウェイヴやシテイポップ・リバイバル、Y2Kなどの形で表出している新しいノスタルジーは、この「生活用品からメディアコンテンツへ」という対象の変化が現れており、今後もこの傾向は続くだろう。

昭和レトロかつ1970～1980年代を対象としたリアルワールドの場所を選定すると、選定先が少なくなってくるのはこのためである。

その上で対象を探すと、典型的な「昭和」イメージの対象である昭和三十年代とその消失点たる1980年代の狭間、

つまりは生活用品へのノスタルジーからコンテンツの質感へのノスタルジーへと移行する最中の1970年代に、一つ面白い場所がある。オートレストラン、オートスナック、コインレストランなどと呼ばれる自動販売機コーナーである。

オートレストランは、街道沿いを中心に長距離トラックのドライバーを対象として、深夜でも食事することが可能な（基本的に）無人施設だ。天ぷらそばやうどん、ハンバーガー、トーストなどの自動的に調理する自動販売機が設置されており、いつでも温かい食事をすることができる。また、1978年にスペースインベーターが社会現象となった後は、オートレストランと郊外型ゲームセンターを併設した施設も登場した。埼玉県のオートパーラー上尾や、行田の鉄剣タロイなどがそのパターンだ。

ただ、コンビニの24時間営業が標準となった1990年代以降、コンビニの持つ「深夜でも温かい食事ができる」という特徴は、オートレストランのそれと重複するようになった。コンビニの利便性が高まるのと反対に、オートレストランは店舗を減らしていった。



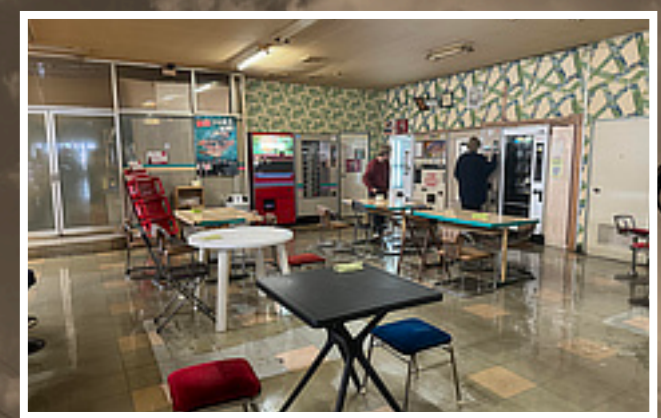




# 埼玉 オートパーラー上尾

コンビニが全国拡大する前に活躍をみせたのが「オートレストラン」。うどんやそば、トーストなどが買える自販機があり、その場で食べられる年中無休の無人の施設である。長距離ドライブの休憩

時に多くの人が利用した。埼玉で人気のある「オートパーラー上尾」で出されているそばやうどん、トーストはお店の手作り。朝から夕方、時には夜間まで欠かさず補充している。



↑自販機コーナーはゲームセンターの隅っこに併設。遊びのついでに食べに来る人もいる。



↑オートパーラー上尾ではうどんとそばやトーストなど、大変貴重でレトロな自販機がある。



↑ゲームセンターが主体で、レトロなアーケードゲームからオンライン麻雀ゲームなど遊べる。

できあがるまで  
なんと**27秒!**



オートパーラー上尾  
【住所】  
埼玉県上尾市久保 70-2

先ほど触れた鉄剣タローは2020年5月末に惜しまれながら閉店したものの、岡田磨里監督のアニメ映画『アリスとテレスのまぼろし工場』（2023年）にも「オートレストランみふせ」という名前前で登場するなど、閉店後も人気を博している。

2010年代後半から、魚谷祐介の『日本懐かし自販機大全』などを通して、自動販売機やオートレストランに対するノスタルジーが人気となってきた。私がオートレストランを訪れるようになったのもその頃からだが、年々、天ぷらそばを食べる前に撮影する人を見かけることが増えており、レトロな場所としての人

気が高まり続けているのを肌で実感している。

しかし、オートレストランの人気の高まりは、単にノスタルジーの対象が広がったことを意味するのではない。言い換えれば、空間や生活様式と密接に結びついた生活用品の延長でも、また時代の空気を反映したコンテンツの質感の初期段階でもない、物質性とも質感とも違う何かがある。

私がオートレストランを好むのは、自動販売機が置いてあればどこでもオートレストランに「なる」ことだ。中古タイヤ市場 相模原店は名前の通りタイヤやアルミホイールの専門店のだが、同社

の社長の趣味でオートレストランの自動販売機が90台ほど置かれており、オートレストラン趣味の人間にとっての聖地となっている。例えばノスタルジーの対象となりやすい銭湯や純喫茶、町中華などは、ケロリン桶やベロア生地椅子などを取り出してみても、その施設を再現できるわけではない。生活用品はそれを用いる空間や生活様式と分かち難く結びつく。だからこそ空間全体を丸ごと保存するために、博物館や資料館が役割を果たしてきたわけである。

ところが、オートレストランの自動販売機はどこに置いていても機能し、その在りし時代の残り香を堪能することができる。



↑レトロ自販機の中でレアなうどん自販機がなんと同時に3台稼働している、珍しい場所として知られる。



## 島根

### 名物スタミナうどん 後藤商店

島根県の西部、石見地方の中で有名な場所といえば、「後藤商店」の自販機コーナー。天ぷらうどんや肉そば、ラーメンなどラインナップがあり、その中「スタミナうどん」が名物だ。自販機なのにトッピングが豊富な量の特徴。ドライブのひと休みにおすすめ。



#### 後藤商店

【住所】

島根県益田市安富町 1905-3

資料館の所蔵品でもなく、感じられはするが空間には漂うに留まる空気感でもない形で、1970年のそれは、そこかしこに「本当に」あるのだ。つまり、施設自体が古くなくても、あの自動販売機さえあればオートレストランのノスタルジィは現在でも作ることができるのである。純喫茶にせよ、銭湯にせよ、現在はレトロ趣味の代表格とも言える施設は、経営者の高齢化によりいつの間にか閉店してしまうことが多々ある。オールドスタイルの純喫茶を新たに開店したとしても、やはりそこには「本物」のレトロではないという感想を抱きがちだ。

オートレストランの自動販売機は、1970年代のタイムカプセルだ。硬貨を入れて天ぷらそばのボタンを押し、ニキシー管のカウンターがゼロになったら、25秒で1970年代にタイムスリップすることができる。特に島根県のオートレストランは、後藤商店の石州瓦との相性が素晴らしい。出雲観光と併せて、石見地方のオートレストランを回ることをオススメしたい。

(文:わく)



↑「ラーメン」「うどん」のぼり旗が一際目立つのが特徴。なんともレトロな出立ちするうどん&ラーメン自販機はしっかり健在だ。

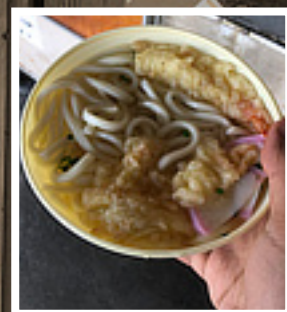


#### 自販機コーナーオアシス

【住所】

島根県益田市安富町 2597-1

島根県益田市に向かうと車が沢山停まっついて一際ざわついている自販機スポットがある。この自販機はラーメンと鶏天うどんなど、レパートリーも豊富だ。価格はリーズナブル。他にも肉巻きおにぎりやお菓子、パンの自販機もある。



↑この安さで具材はしっかりとしている。

## 島根

### 自販機コーナー オアシス

これは1980年以降の質感へのノスタルジーにも見られない特徴である。PCでヴェイパーウェイブを流しても、その空間が1980年に「なる」わけではもちろんなく、隔たった時代の空気を（おそらくは些かなりとも）現在の抵抗感とともに纏うに留まるだろう。言うなれば、オートレストランの自動販売機はゲームセンターのゲーム筐体のように、ノスタルジーの対象がモジュール化されているのである。

この点は、オートレストランの施設の外装が違っていても、等しくオートレストランとして成り立つ特性にも繋がっている。島根県にはオートレストランが多く、西の聖地とでも呼ぶべき場所だが、特に益田市の後藤商店は面白い。石見地方で生産される赤褐色の石州瓦の屋根が特徴的な施設で、おそらく元々は普通の商店だったと思われる。それでも店内に自動販売機が置かれているだけで、オートレストランに「変化する」点が興味深い。

オートレストランは、ノスタルジーの対象を何気ない今この空間に現に生じさせる。普段の生活とは隔たった博物館・



# Gravure

: Japan After School

撮影：neirow



station

VR CHAT

## 哲学カフェ 芳紅堂

Japan After School  
billis kitchen 1950s

執筆：ヤマノケ  
撮影：neirow



cluster

## さよならの向こう側

執筆&撮影  
：ヤマノケ



## Lost in Japanese summer

執筆：sun  
撮影：一兔



## オートパーラー上尾 自販機オーナーオアシス 後藤商店

執筆&撮影：わく



**ニツソちゃん**  
編集長

思い出したい過去、忘れたい過去、あったかもしれない未来。それらを飲み込んで列車は走ります。次のテーマは「車・車両」。お手持ちの切符を無くさないように。

**SUN**  
ライター

本雑誌で扱っているVRSNS以外にも、最近My Vketなどの別のプラットフォームに行って、エッセイなどを綴っています。新天地を冒険して、それを日誌のように書き残す。なんて幸せな日々。

**わく**  
ライター

最近、虎ノ門のヘッケルンというプリンが有名な純喫茶に行ったら、TikTok経由でバズっていたらしく、お客さんの八割は海外の方でした。昭和レトロの人气が国内に留まらなくなったのを、肌で感じます。

**Tokikaze**  
カメラマン

古い物の匂いって何故か脳みそに染み入りますよね。五感の中でも嗅覚はとても記憶と結びやすい感覚らしいです。写真から懐かしい匂いを感じたあなたはもうノスタルジックシンドロームです。

**一兔**  
カメラマン

つよつよユーザーに沢山教わりながら撮りました！

**思惟かね**  
編集/デザイン

見た目はレトロだけど中身は最新、みたいなのが好きです。古いからレトロなのではなく、時を超えた「異世界感」が好きなんでしょうね。

**燕谷古雅**  
編集/デザイン

電腦荒廢の編集がひと段落したと思いきや、Webページのデザインも作らないといけなかったから、紙面編集と並行してやったぜ。

**ヤマノケ**  
ライター

VRChatに初めて入ったのは2020年頃だけど、それ以前に作られたworldへ赴くと得も言えない野暮ったさや懐かしさを感じる。VR上にも"レトロ"があるのかもしれない。

**neirow**  
カメラマン

クリームソーダとメロンソーダをよく間違えますが、生きるのに困ってないのでありのままの自分で生きていこうと思います。

**Nag**  
校正

校正中になぜか、『リズ青』のある台詞「私にとってはずっと今」を思い出していました。所謂「レトロ」とは真逆で幾重にもすれ違う台詞なのは明らかですが、すれ違い方が似ているかもとか。

STAFF 編集長 | Editor Chief  
ニツソちゃん  
誌面デザイン | Design  
思惟かね  
燕谷古雅

執筆 | Writer  
ヤマノケ  
ニツソちゃん  
sun  
わく

撮影 | Photographer  
neirow  
Tokikaze  
一兔  
わく

校正 | Proofreading  
Nag

Platform Vol.11 【レトロスペクティブ昭和】

発行：Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)

初版 (2024/7/1)

To the next JOURNEY.

感想などは #Platform通信欄 へぜひお寄せください！

2024. 7. 1

*Our  
Journey  
Continues...*

*Platform*

Vol.11

レトロスペクティブ  
昭和